

香淳皇后 国民の母に



那須御用邸を散策される昭和天皇と香淳皇后
—昭和59年8月

実録公開

宮内庁は9日、昭和天皇の後、香淳皇后の97年にわたる生涯を記した「香淳皇后実録」を公開する。先の大戦をはじめとする激動の時代状況を

踏まえ、戦前から戦後にかけての動静を克明に記述。すでに昭憲皇太后

(明治天皇の后)と貞明皇后(大正天皇の后)の実録はまとめられており、今回の公開を通じて、現代につながる近代史探究の進展が期待される。

香淳皇后は明治36(1903)年、久邇宮邦彦王の長女として誕生し、良子と命名される。実録では、14歳で昭和天皇との結婚の予定が決まり始まったお妃教育の一部が初めて明らかに。「国民の母」として成長してい

簡潔に事実を記し、詳しいことは出典に譲る形で編纂された。香淳皇后がどのような方だったかを知る手がかりとなる。近現代の皇室史、特に女性皇族の研究には不可欠の基礎資料となる。

とりわけ、皇太子妃に内定され、ご成婚されるまでの良子女王の修学ぶりは、平成26年に公開された昭和天皇実録に記述が少なく、両実録を関連させて読むと興味深い。

所功・京都産業大名誉教授

強い向学心で広い見識

健康面では、70代ごろまで大病されなかった。お体を大事にしながらか長寿を全うされたことは、昭和天皇との長きにわたる務めを果たすことができたことの大きな要因といえるのではないかと。

新たに明らかになったのが、御学問所における多彩なご進講の内容だ。強い向学心から、広い見識を身に付けたことが皇后になられてからも大いに役立ったとみられる。

く姿が記されている。昭和20年8月15日正午、皇居の御文庫で昭和天皇の玉音放送を静かに聴いたことも記載された。

実録は計3828ページで、誕生から平成12年の崩御までを時系列に記載。全文は9日午前9時半から宮内庁で一般公開され、同庁ホームページでも見られる。

宮内庁の担当者は「近代日本の3代の皇后実録がそろい、皇后研究の素地ができた」とした。

20面に「玉音放送」、21面に「激動の時代」

皇室の高齢化 在り方提起

明治に生まれ、大正に女性皇族として成長し、昭和には「国母」として国民に寄り添い続けた香淳皇后は平成12年6月16日、97年の生涯を終えた。9日に公開された「香淳皇后実録」の記述から浮かび上がる老年期の姿は、上皇さまの譲位に象徴される皇室の老いの在り方を投げかけている。

(内田優作)

で静養中のときだった。

腰痛め公務減少

《朝に腰を痛められ、天皇と共にお出ましになる予定であった植物の御調査をお取りやめになり、終日、御用邸において安静にお過ごしになる》

香淳皇后は趣味を楽しむゆとりも持ち、心身の壮健さを保ちながら、老境に至ってなお精力的に公務をこなしてきた。その歩みに加齢に伴う病やけがが影を落とし始めるのは、昭和52年7月17日、栃木県的那須御用邸



アルバムを見る昭和天皇と香淳皇后—昭和62年

その後、一部腰椎が変形していることが判明。コルセット着用を余儀なくされ、昭和天皇と2人でそろって公務に臨むことは減ってしまう。さらに認知症の兆候もみられるようになった。

実録は55年の全国戦没者追悼式の様子をこう記述する。《黙禱のため御自席から式壇中央に移動される際、中途でお止まりになり、その場で黙禱され、天皇のお言葉の後、御自席にお戻りにな

る》

昭和天皇の侍従長を務めた入江相政の日記をみると、56年11月7日のくだりに、入江が当時の宮内庁長官と「御引退の時期」について相談したと記されている。

規定にない譲位

56年5月18日、ベルギー国王弟との会見を最後に海外要人の接遇はなくなり、新年の一般参賀にも62年を最後に姿を見せることはなくなった。

宮内庁も内規を改正するなどして負担軽減を図っていたが、国民から皇后の健康を案じる声が絶えなかった。62年12月には、宮内庁次長が国会で

「老人特有のいろいろな状況がある場合がよくございいます」と皇后の状況を説明することになる。

日本社会の高齢化が加速する中、皇室もまた同種の課題を抱えている。

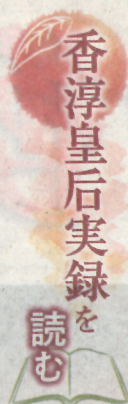
それが顕在化したのが、在位中の上皇さまが示したご意向をもとに、

平成31年に実現した譲位だ。上皇さまは28年のビデオメッセージで「既に80を越え、幸いに健康であるとは申せ、次第に進む身体の衰えを考慮する時、これまでのように、全身全霊をもって象徴の務めを果たしていくことが、難しくなるのではないかと案じています」と述べられた。

明治に定められた旧皇室典範には、天皇の譲位規定はなかった。京都産業大の所功名誉教授(日本法制文化史)は「当時は人生50年の時代。そのころにはベストのものであっても、時代の変化に合わない面も出てくる」と話す。

上皇さまの譲位は特例法を設ける形で決まった。時代に応じた皇室の在り方について、所氏は「皇室の方々のご意向を尊重しながら、伝統の本質を守るために、変えるべきものは慎重に変えていく知恵を絞るべきだ」と語った。

昭和天皇との仲むつまじさ



香淳皇后は、自身が病弱な大正天皇を支えてきた貞明皇太后の厳しい期待に応え、「良妻賢母」のお手本と仰が



昭和天皇と香淳皇后―昭和21年

京都産業大名誉教授 所功氏

れた。実録からは昭和天皇に尽くすことを喜びとし、2男4女をのびのびと育てられた過程がよく分かる。

多様な公務の中でも、趣味を楽しむ余裕をお持ちだった。画家の高取稚成^{わかななり}などに指導を受けて日本画をよくし、画集も複数公刊されている。

一見、香淳皇后実録は、無味乾燥な記述の羅列に映るかもしれない。しかし、精読すれば、興味深い事実も随所に見られる。

ラジオ放送が始まって今年で100年を迎えた。大正14年3月1〜3日、皇太子時代の昭和天皇とともにラジオの試験放送を聴こうとされ、雑音や機器の故障でかなわない中で何度も聴取を試みられたとの記述には、お二人の仲む



つまじさと好奇心の強さが感じられる。

海外ご訪問では、現地で妨害行為も受けられた。初のご訪問中の昭和46年10月10日には、スイスで《赤十字を始め

しデュナンの苦しみをジュネーヴの秋にしみじみと思ふ》と詠まれた。先の戦争によって日本が反感を持たれる中、敵、味方を超えた和解に至るため努められた心境が伝わる。そのような状況で2回の海外ご訪問をされたが、駆け

寄った子供から花束を受け取られる記述も複数みられる。上品で朗らかな「国母」として日本人に親しまれた人柄と優しい笑顔が、各国民からも歓迎されたということもよく分かる。

ご健康なころは、皇居で草取りや清掃に当たる「勤労奉仕団」へ昭和天皇とともにご会釈するのが日常で、私も2回参加し、震え上がるほどの感動を覚えた。実録によって、昭和20年の「みくに奉仕団」による最初の奉仕から40年近い間に、約1万7千団体へご会釈されたことも明らかになったことの一つだ。

(聞き手 内田優作)

◆ 今月9日に公開された「香淳皇后実録」では、明治から平成の4時代を生きた香淳皇后の歩みをたどっている。皇室に詳しい専門家に、実録の意義や読みどころを聞いた。